

国見ヶ丘



私が短歌の結社「にしき江」傘下の清流歌会に加えて頂いてから三年半ほどになる。しかし何かと気が多い私のこと、落ち着いて歌の道に専心したいとは願いつつも、目先にちらつく雑事に気を取られて、月例の歌会の前の二三日にひたすら呻吟することを繰り返している。その都度反省はするものの、改まるにはまだ時間がかかりそうである。これは私の気分がまだ若い証拠かななどと、勝手な気休めをしているが、これが終生変わらぬ性分では、私は到底歌人にはなれないだろうとか何とかな真面目に考えねばならない。

その歌会の幹事さんの肝入りで、年毎なのだろうが会員の歌集を作っている。去年は出版しなかった

ので、今年は二年分の中から二十首を自選して、七月の歌会の折に提出するようになることである。私はワープロ党で、毎月鶴田主幹に四首選んで頂くために、月毎にページ替えをしてフロツピーに入れてあるそこで一昨年の夏あたりの分から呼び出して、各月から二首ほどを選んで連結して行く作業を始めた。

この二年を振り返れば多くの事件があった。一昨年早春の父の死とそれに伴う仏事で信州までの往復、同居していた末娘は鹿児島に帰り、その後出水に就職したことも大きな変化であった。しかしそれらはいずれ歌に詠まれることはなかった。歌を選んでいて我ながら驚いたことは、鹿児島に戻ってからの短期間に、私たち夫婦が何と多くの九州の旅をしたことかということである。

湯布院に夫の会社の寮があることもあって一昨年は阿蘇、久住、竹田、高森などの秋の錦繡を何回も訪れた。商工会の見学で佐賀や雲仙にも連れて行ってもらった。夫の運転で日向に泊まり、牧水の生家

を訪れた。耳川を下って美々津に出て、神武天皇の
出港された跡を見ようとした時には、折しも日向沖
地震の直後だった由、津波警報が出ているから海岸
には行けないと、街道に避難していた若い主婦が教
えてくれたのだった。

またふと思い立って初夏の一日を佐多岬まで遠出
したこともある。大根占でバッテリーがイカれて、
JAFを呼ぶ羽目になった。交換に二万何千円かか
るといふのに手持ちがなくて、整備工場に行く前に
先ず銀行まで牽引してもらったことも忘れられない。
そしてその故障が人気のない佐多の山中でなくて本
当によかったと胸を撫で下ろしたのだった。

夏休みになると四国の娘夫婦が、車内に二台もテ
レビの付いたGMの超高級ワゴン車でやってきては
遠征する。一昨年は串木野のゴールドパークから知
覧、池田湖まで行った。孫たちは風景よりも甲子園
の実況放送に夢中である。立ち寄った特攻会館では
私たちの方が胸を衝かれ、暫くは口がきけなかった。
去年は吹上浜から笠沙の岬を巡って、枕崎のおさ
かなセンターで昼食を食べた。翌々日は志布志から

鹿屋を抜けて桜島経由で戻った。本当は私は吾平山
陵に行きたかったのだが、せつかちな男どもは探す
こともなく、ただ車を走らせているばかりだった。
今年には孫も高二と中三になって、東京に遊びに行
くという。親の言うなりに一緒に旅をする年頃はも
う終わったのだらう。

夫の高校時代の友人Hさんは、K銀行の熊本支店
長だったこともあって、私たちを阿蘇の高森や矢部
の通潤橋を案内して下さった。その後高千穂の登頂
や屋久島一泊旅行など計画して下さって、沢山の思
い出が追加されて来た。

そのHさんもメンバーである南九州城郭談話会は、
三カ月に一回ではあるが、今や草藪と化している山
城を探索する。今までに始良の岩剣城、佐土原、額
姪、知覧、高岡町などの山々を登った。どうみても
只の山としか見えないのに、専門家の説明で土塁や
曲輪の跡なのだと確認する。夏にはムヒが必需品で、
山をよじ登るのに軍手を持参することも覚えた。現
地に各自集合するのだが、町内の会員と話し合って
分乗して行ったりする。佐土原のときは彼らと一泊

することにしまして、前日西都原古墳群を見学した。帰路は時間があれば途中の名所を訪れることにしています、それも楽しみの一つである。

そしてこれらの旅の感慨の数々は、その月々に短歌となつて記録されていた。

今回（平成十年六月末）の山城は日向高千穂町だった。三木会長が、前夜古くから伝わる夜神楽を見ると言われたので、私たちもHさん夫妻ともども会長と同じ宿を取った。車はHさんに便乗させてもらう。

早朝に家を出て、高速を松橋で下り矢部から高千穂に向かう。先ずは高千穂峡を目指した。天下の名峡の高千穂峡は、梅雨の豪雨後で水が濁っていたのが残念だった。

その後天の岩戸神社に向かった。神主さんに「向かいの山壁が天の岩戸です」と説明されて、天上天下がこんがらがった思いで戻り、予約の宿を探した。

三時頃、宿に着いて聞くと、六時から先生を囲んでの夕食会、それから夜神楽見物とのこと。まだ時間があるので荷物を置いてまた外に出た高千穂峡の

道すがら見た国見ヶ丘への矢印を曲がる。つづら折りの山道を走るとやがて丘の頂上に着いた。車を下りて丘のてっぺんに登ると、大きな三人の神様が手をかざして見下ろしている像があった。私たちも眺望すると村々を囲んで四方は緑濃い山々である。遠く阿蘇の根子岳も霞んで見えた。

神々の見下ろし給ひし岡に立てば

緑鎮まる四方の山なみ

悠久の時の流れに黙しつづ

四季のうつろひ纏ひ立つ山

四方の山従へ臨む神の丘

天地の軸に吾も立ちある

神々の伝へ俄に懐かしと

思へる日向の丘の夕暮れ

何か自分が、大いなる宇宙の中心にあるような思いで胸を張って深呼吸した。そして七月の歌会の日、六首の内から鶴田主幹がお選び下さったこの四首を「にしき江」九月号用に提出して、私の旅の記録にまた一つの頁が加わったのだった。